

広島県感染症発生動向月報

[広島県感染症予防研究調査会]
(平成22年5月解析分)

1 疾患別定点情報

(1) 定点把握(週報)五類感染症

平成22年4月分(平成22年3月29日～5月2日:5週間分)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
1	インフルエンザ	260	0.45	4.15		10	百日咳	49	0.14	0.07	
2	RSウイルス感染症	86	0.24	0.11		11	ヘルパンギーナ	38	0.11	0.08	
3	咽頭結膜熱	115	0.32	0.38		12	流行性耳下腺炎	447	1.24	0.76	
4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	342	0.95	1.43		13	急性出血性結膜炎	9	0.09	0.03	
5	感染性胃腸炎	2,887	8.02	7.80		14	流行性角結膜炎	95	1.00	1.10	
6	水痘	605	1.68	1.52		15	細菌性髄膜炎	0	0.00	0.01	
7	手足口病	991	2.75	0.25		16	無菌性髄膜炎	6	0.06	0.04	
8	伝染性紅斑	38	0.11	0.22		17	マイコプラズマ肺炎	26	0.25	0.27	
9	突発性発しん	199	0.55	0.61		18	クラミジア肺炎	0	0.00	0.00	

(2) 定点把握(月報)五類感染症

平成22年4月分(4月1日～4月30日)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
19	性器クラミジア感染症	51	2.22	2.13		23	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	138	6.57	5.17	
20	性器ヘルペスウイルス感染症	12	0.52	0.64		24	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	40	1.90	1.59	
21	尖圭コンジローマ	11	0.48	0.49		25	薬剤耐性緑膿菌感染症	1	0.05	0.16	
22	淋菌感染症	19	0.83	0.85							

「過去5年平均」:過去5年間の同時期平均(定点当り)

報告数が少数(10件程度)の場合は発生記号は記載していません。

急増減疾患!!(前月比2倍以上増減)

急増疾患 ヘルパンギーナ (5件 38件)

発生記号(前月と比較)

急増減			1:2以上の増減
増減			1:1.5～2の増減
微増減			1:1.1～1.5の増減
横ばい			ほとんど増減なし

定点把握対象の五類感染症(週報対象21疾患,月報対象7疾患)について,県内178の定点医療機関からの報告を集計し,作成しています。

	内科定点	小児科定点	眼科定点	STD定点	基幹定点	合計
対象疾病No.	1	1～12	13, 14	19～22	15～18, 23～25	
定点数	43	72	19	23	21	178

2 一類・二類・三類・四類感染症及び全数把握五類感染症発生状況

類別	報告数	疾患名（管轄保健所）
一類	0	発生なし
二類	54	結核（広島市保健所（24）、福山市保健所（12）、呉市保健所（8）、西部保健所（3）、西部東保健所（3）、東部保健所（4））
三類	0	発生なし
四類	13	レジオネラ症（3）（広島市保健所、福山市保健所、呉市保健所）、 A型肝炎（9）（福山市保健所（3）、呉市保健所（5）、東部保健所（1））、つつが虫病（1）（西部保健所）
五類全数	8	クロイツフェルト・ヤコブ病（2）（広島市保健所、西部保健所）、梅毒（2）（広島市保健所、呉市保健所）、ジアルジア症（1）（広島市保健所）、後天性免疫不全症候群（1）（広島市保健所）、アメーバ赤痢（1）（東部保健所）、麻しん（1）（広島市保健所）

3 一般情報

手足口病及び百日咳の患者数が、全国と比較して本県では多く、また県内の過去5年平均より多い状況が続いております。これらは、これから流行する感染症で、更に患者数が増加することが予想され、注意が必要です。

(1) 手足口病について

手足口病は、口腔粘膜、手、足などの水泡性発疹を主症状とした、乳幼児を中心に夏季に流行する急性ウイルス性感染症です。

病原体 コクサッキーウイルスA16型・エンテロウイルス71型、コクサッキーウイルスA10型など

症状 感染から3～5日の潜伏期間の後に、口腔粘膜、手、足などの四肢末端に2～3mmの水疱性発疹が現れます。発熱は軽く、通常高熱が続くことはありません。一般的には、数日間で治癒する予後良好の感染症です。ただ、発疹の初期2～3日の症状の変化には注意が必要で、ことに、元気がない、頭痛・嘔吐を伴う、高熱を伴う、発熱が2日以上続く、などが見られた場合には、かかりつけ医に受診するようにしてください。

また、まれに重症化や合併症を伴う場合があり、特にエンテロウイルス71型に感染した場合は、髄膜炎、脳炎などの中枢神経系合併症を生ずることが比較的多いので注意が必要です。

感染経路 飛沫感染、接触感染、糞口感染で、主症状が回復した後も比較的長期間にわたって、便などからウイルスが排泄されることがありますが、基本的には軽症疾患なので、保育園や幼稚園などを休む必要はありません。

予防方法 手洗いの励行、排泄物の適正な処理

(2) 百日咳について

百日咳は、特有のけいれん性の咳発作（痙咳発作）を特徴とする急性気道感染症です。

病原体 百日咳菌・パラ百日咳菌

症状 急性呼吸器感染症で、特有な咳（顔を真っ赤にして立て続けに激しく咳き込み、最後にヒューと音を立てて息を吸い込む）が特徴です。通常、7～10日間の潜伏期を経て、普通のかぜ症状で始まり、合併症がない限り熱はなく、次第に咳の回数が増えて程度も激しくなります。1～2週のうちに特有の咳がでます。咳は夜間に多く、咳の発作と発作の間は熱もなく、健康な状態とあまり変わりませんが、この時期には、眼瞼が腫れた状態になります。特有の咳は、3～4週続き、だんだん咳の回数も減り、回復期に入ります。

乳児（特に生後6月未満）が感染すると、重症化しやすく、時には死に至る危険性がある疾患です。成人では咳が長く続きますが、乳幼児にみられるような特徴的な発作性の咳がなく、罹患に気付かれず、感染源となって周囲に感染を拡大させてしまうこともありますので注意が必要です。

感染経路 発症患者の鼻咽頭や気道分泌物による飛沫感染と接触感染があります。

予防方法 予防接種を受けることが効果的な予防法なので、市町が実施する定期予防接種の対象の方は、できるだけ早く予防接種をすませましょう。

また、次のことにも平素から注意して、予防に努めましょう。

外出時、マスクを着用し、人混みはなるべく避けるようにしましょう。

帰宅時は、「手洗い」と「うがい」を励行しましょう。

咳が続く場合は、安静にして、早めに医療機関を受診しましょう。

(3) その他

この他にもヘルパンギーナが3月に比べ急増しており、これから夏にかけて流行する感染症なので注意が必要です。ヘルパンギーナは夏かぜの代表的な感染症で、1～4歳時に好発しますので、乳幼児のオムツ交換の際は、手洗いの励行を行い、洗濯物を日光で乾かすなどして予防しましょう。